〈中学校国語〉

音声言語表現能力を育てる国語科学習指導の工夫

― 音声言語指導の場の設定と年間指導計画への位置付けを通して ―

南風原町立南星中学校教諭　座嘉比　幸　枝

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由……81

Ⅱ　研究仮説……81

Ⅲ　研究内容……81
　1　音声言語表現能力の育成の意義……81
　2　実践にあたって……82
　　(1)　音声言語教育について……82
　　(2)　音声言語の取り立て指導について……83
　　(3)　「理解」領域における音声言語指導について……84
　　(4)　論理的な話し方を指導するにあたって……84
　　(5)　音声言語年間指導計画……86

Ⅳ　授業実践……87
　1　単元について……87
　2　単元設定の理由……87
　3　単元の指導計画と指導目標……87
　4　本時の指導計画……88
　　(1)　指導目標……88
　　(2)　本時で押さえたい基礎基本的事項……88
　　(3)　授業の仮説……88
　　(4)　展　開……88
　5　授業の考察……89
　　(1)　授業仮説①についての考察……89
　　(2)　授業仮説②についての考察……89
　　(3)　授業仮説③についての考察……90

Ⅴ　研究の成果と今後の課題……90
　1　成　果……90
　2　今後の課題……90

〈中学校国語〉

音声言語表現能力を育てる国語科学習指導の工夫

― 音声言語指導の場の設定と年間指導計画への位置付けを通して ―

南風原町立南星中学校教諭　座嘉比　幸　枝

Ⅰ　テーマ設定の理由

国語科の目標は、国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てることである。社会生活はもちろん学校生活においても、私達は日本語を用いて思考し理解するが、意思の疎通や知識の伝達などの表現にあたっては文字言語よりも音声言語を使用することが多い。したがって音声言語に対する言語感覚を豊かにし、認識を深め、尊重する態度を育てることは大切なことである。情報化や国際化が進む現代においては、価値観の多様化や、異なる文化との触れ合いの中で、音声言語を使ってのコミュニケ-ションを図ることが求められるようになり、その能力の育成がよりいっそう重要になっている。

平成元年に改訂された学習指導要領においても、表現指導の重視がうたわれている。中でも音声言語表現能力の育成が重要視され、平成３年には、音声言語の指導資料が文部省から発行されている。

しかしながら、本校における指導の実態を考えると、文字言語の指導のみに終始して音声言語の指導は十分には行なわれていないのが現状である。教科書に掲載されているモデル教材でさえも、読み取りや知識の詰め込みに終わってしまい、生徒の聞く、話す活動を取り入れた学習指導はややもするとおろそかにされがちであった。生徒の実態を見ても、学校や学級の中での友達同士のコミュニケーションには不自由は感じてないようであるが、改まった場における発言や発表となると、しりごみをしてしまう生徒がほとんどである。音声言語表現の指導が十分でなかったために、自分の考えをまとめて相手に分かりやすく話すというような主体的な音声言語表現能力が育てられてこなかった結果である。

これまでの指導を反省し、国語科の授業において、音声言語表現の指導を効果的に取り入れていく方法を考えることが、本研究のねらいである。話す活動と聞く活動とは、表裏一体のものである。よい話し手を育成するためには、よい聞き手を育てなければならない。話す学習活動と共に主体的に聞く学習活動についても指導をする必要がある。

そこで、中学校三か年の見通しを立て、継続した指導を行なうために、聞く、話すの音声言語の取り立て指導や、「理解」領域における音声言語指導の方法を工夫して、年間指導計画の中に位置付けることによって、生徒の音声言語表現能力を育てることができると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究仮説

国語科の指導において、主体的な読み手、聞き手を育成することを大切にしながら、それぞれの考えを話したり、まとめて発表したりする音声言語表現能力を生徒に身に付けさせるための主体的な学習の場を設定し、中学校三年間の学習指導計画に位置付けることによって、生徒は、音声言語表現能力を身に付けていくことができるであろう。

Ⅲ　研究内容

1　音声言語表現能力の育成の意義

学習活動を支える能力として音声言語能力の果たす役割は大きいが、現代社会はその能力を磨き合う機会を奪いつつあるように見える。人間関係の希薄化、生活環境の機械化による「無言化現象」は、コミュニケーションの場を更に失わせている。しかし、情報化・国際化時代の進展に伴い、異文化を含めた多様な価値観をもつ人々とのコミュニケーションを図るためには、これまでにもまして主体的な音声言語表現能力の育成が求められているのである。

2　実践にあたって

(1)　音声言語教育について、安居總子の説明を簡潔にまとめると、次のようになる。

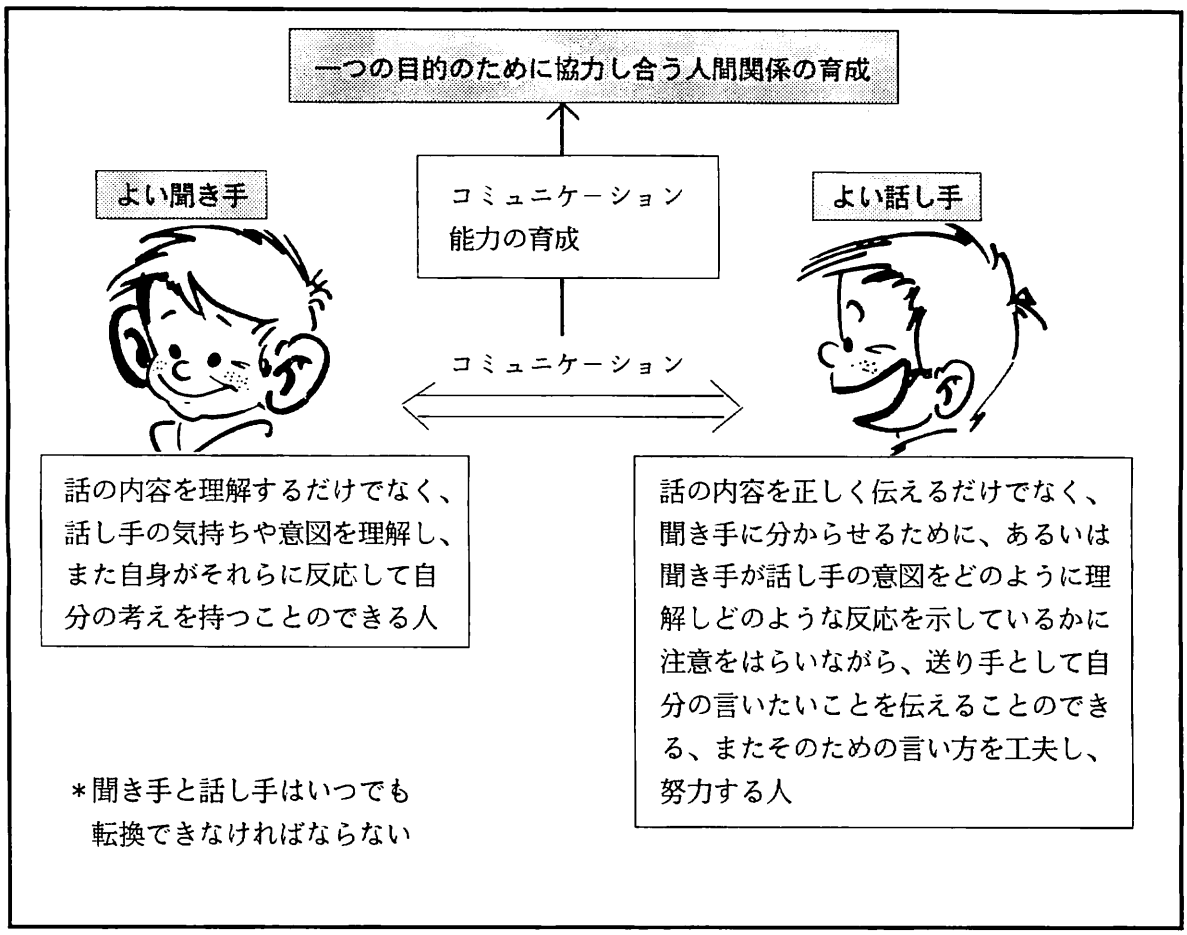

図１　「音声言語教育について」

上の図を見て分かるように、よい聞き手、話し手を育てるということは、コミュニケーション能力を育てるということである。

では、コミュニケーション能力とはどういうものかというと、安居總子は次の９項目を「よい聞き手・話し手に必要なコミュニケーション能力」として挙げている。

①　自分の考えを相手に理解させる力、また理解させようとする力

②　相手の気持ちや意図を理解する力、また理解しようとする力

③　相互に考えを出し合う中で、自らを成長させていこうとする力、および態度

④　話し合いながら、自分の考えを豊かにし、整理し、結論に導いていこうとする思考力および態度

⑤　自分の置かれている場を意識し、そこに順応させ、そこから最良の考えを出していこうとする力、および態度

⑥　自分がそこにいて、相手と話し合う中で、その場（環境）を改善し、創造していこうとする力、および態度

⑦　相互に話し合うことを通して、人間理解を深めていこうとする態度

⑧　相互に話し合うことが、人間理解のもとにあることの認識

⑨　目標遂行のためには、相互に話し合うことが最良であり必要不可欠であることの認識

よい聞き手、話し手となるためには、話すこと・聞くことが役に立つものだと認め、話したり、聞いたりすることを楽しいと思うことが、まず大切である。そのことを生徒によく理解させて授業に臨み、上記の９項目を身に付けさせる指導の工夫が必要である。

(2) 音声言語の取り立て指導について

学習指導要領の総則の「第6　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2の(1)に「学校生活全体を通して、言語に対する意識や関心を高め、言語環境を整え、生徒の言語活動が適正に行なわれるよう努めること。」と述べられている。この考え方に基づいて、音声言語指導の場面を国語科に限ることなく、学校教育のあらゆる場面で行なわれるものとして、四つの領域に分けて設定した。

表1　「音声言語指導の四つの場面」

学校全体で取り組むもの	①日常の指導	○ あいさつの指導（職員室への出入り、用件の話し方なども含めて） ○ 短学活の司会指導、返事の仕方の指導 ○ 集会や行事などの司会、進行、内容の言葉に対する指導 ○ 集会での話や放送などを聞く指導 ○ 教師の言葉遣い、聞き方
国語科の年間計画に位置付けて取り組むもの	②基本単元	○ 教科書掲載の教材を活用しての音声言語表現指導
	③関連単元	○ 理解単元・表現単元（文字言語）の学習指導の中での音声言語指導 ○ 理解単元から音声言語学習への発展学習
	④特設単元	○ 音声言語能力の基礎作りを意図した指導（帯単元にするとよい） ・発声・発音の練習 ・一分間スピーチ ・聞き取りゲーム

表の中の④特設単元がいわゆる「取り立て指導」である。次に、その指導例を述べる。

ア　発声・発音の練習を、毎時間5分間設定する。

小学校では、「はっきりした発音」「正しい発音」「正しい姿勢」「口形」「声の大きさ」「音量・速さ」「言葉の抑揚」「強弱」「アクセント」などについて学習をしてきている。中学校では、その基礎の上に立って、「話す速度や音量・言葉の使い方」（中1言語事項(1)　ア）、「言葉の調子や間の取り方」（中2言語事項(1)　ア）についての学習をさせたい。しかし、「発声・発音の方法・練習」などは、継続して学習することで効果が表れるものなので、毎時間の冒頭にゲーム的感覚で取り入れた。

生徒に声を出させるためには、学級の雰囲気作りがまず必要である。民主的で、開放的な環境を用意する。そして教師自身の音声言語の態度と能力も、大切な環境となることを忘れてはならない。声を出させるポイントとして、次のようなことに留意して実践した。

・背筋を伸ばし、息を十分に吸い込んで発声させる。
・五十音図や早口言葉、同音の繰り返しの多い詩歌などを使って、基礎的練習をさせる。
・自分の声の大きさを確認するために、友達同士で相互評価をさせる。

イ　毎時間10分程度のスピーチの時間を設ける。

「話す力」「聞く力」を育てる取り組みとして効果的なのが、スピーチである。年間を通じて一分間スピーチを継続して学習させたい。スピーチを聞いた後、質問をしてそれに答えたり、聞いた感想を発表させることにより、より意欲的なスピーチにつなげることができる。

スピーチの話題は、自由に選ばせてもいいし、季節や行事などに合わせて指定することもできるが、次のような条件に合うものを選定するようにさせる。

・主題や中心点のはっきりした話であること。
・独創的な話であること。

・具体的な話であること。
・相手や場にあった話であること。
・明るい話であること。

スピーチの実施にあたっても、自由に話すことのできる学級の雰囲気作りが重要である。失敗しても笑われることのない温かい学級作りが、話そうとする意欲を引き出してくれる。スピーチのためのメモを作らせるなどの手立ては必要だが、原稿を読み上げるのではなく、メモを見て話す態度を養いたい。そして、よいところ、進歩したところをほめて励ますことも大切である。聞き手には「聞き取りメモ」を取らせるようにすれば、「聞く力」の学習にも効果的である。教師自身も模範となれるようなスピーチを心掛けたい。

(3) 「理解」領域における音声言語指導について

前項(2)に示した音声言語指導の中で、国語科学習として取り組まれるものに「理解単元から音声言語学習への発展学習」がある。理解単元の、特に説明文における学習の仕方は、ややもするとその教材の内容の理解や国語の基礎・基本になる技能の育成のみに終わってしまいがちである。しかし、生徒が主体的に学習に取り組むためには、生徒の興味・関心に配慮し、更に発展的な学習につなげていくことが求められる。情報化が進むに従い、説明文は一つの情報としてとらえられる。説明文を読むことはその情報を受信することだととらえられ、受信した情報をどう処理し、どう活用するかが新たな課題として求められるのである。活用するということは主体的にその情報を受信し、それを自らの思考力、判断力で選択・整理して発信するということである。理解単元においても表現の学習に発展させて取り組ませることが必要なのである。その学習を「関連単元」として位置付けた。

表 2　「理解活動を音声表現活動へつなげていく取り組み」

情報を再構成して発表する活動	・学習して得た情報について、選択、整理した上で他の生徒に自らの表現法で伝える学習（正確に伝達するため、絵や表やグラフなどを利用する） 〈音声言語表現能力・情報の発信能力を育てる〉
情報の補足をして発表する活動	・学習して得たことについて、疑問に思ったこと、もっと詳しく調べてみたいと思ったことなどについて、自ら課題を持って調べ学習をして発表する 〈音声言語能力・情報の収集力や取捨選択する力を育てる〉
情報を自ら発信する活動	・学習して得た情報をもとに、学習者自らが興味・関心を持ったテーマに沿って情報を収集、選択、整理して、発表につなげる学習 （例：筆者の意見や主張から関連性のあるテーマを設定したり、筆者の意見を違う視点や角度から考えたり、というような学習） 〈音声言語能力・情報を収集、選択、整理する力を育てる〉

(4) 論理的な話し方を指導するにあたって

音声言語を指導する際に、「論理的な表現力、理解力」の育成に留意する必要がある。話し言葉では、聞き手や、話し手の身振り、表情などが言葉のねじれや足りない部分を補ってくれるので、ある程度の「伝達－受容」は成立する。しかし、正確で円滑な「伝達－受容」を行なうためには、「論理的な話」をすることが必要になる。

また、説明文の学習で培われる基本的な技能としても、「論理的な表現力、理解力」は指導されなければならない。

「論理的な話」と「論理的な話し方を身に付けさせるための指導」について、次の図のように考え、実践した。

論理的な話の条件

1　話が目的にあっていること。
2　話の結論が明確であること。
3　結論と理由や根拠がはっきり区別されていること。
4　前の話と的確に筋が通っていること。

⇓

論理的な話し方を身に付けさせるための指導

1　何のために話すのかという目的意識を学習者にはっきり持たせる。
2　発言の時間を限定する。（本時では一分以内で発表できるように限定した。）
3　双括式の話型を典型構造として教える。
「双括の式の構成」が「論理的な話」をするために有効だと考えて、指導した。
└→「話の内容の予告（＝抽象）⇒例（＝具体）⇒結論（＝抽象）」の流れ
○『はじめ』の部分で結論を話す。
○『なか』の部分で具体例や説明などを話す。
・主述の照応に気をつけて、一文を短くする。
・事実と感想、主観と客観などを区別し、一文に一つのことを書くようにする。
○『おわり』の部分のまとめは、あっさりと終わる。
4　話すとき、前の人の話と関係付けて話すようにさせる。

話し方の例

私は○○さんの考えと（に）　同じです。　賛成です。
違います。　反対です。
付け足します。　付け加えます。
それは（なぜなら）、○○○だからです。

（具体例や説明）

だから、私は○○○です。

5　聞き方指導と関連させる。
「聞き取りメモ」を活用して、「論理的な話」に対する意識を高める。
その際、自分の考えと比べながら聞くことを意識付けたり、相手の話の根拠を押さえながら聞くなどの課題意識を持たせると、より効果的である。

⇓

授業の実践

図１　「論理的な話」と「論理的な話し方を身に付けさせるための指導」

授業では、話型の例を「発表のてびき」として生徒に示した。また、「聞き取りメモ」を持たせ、主体的な聞き方ができるようにさせた。

(5) 音声言語年間指導計画

前項(2)に示した音声言語指導の中で、④の特設単元は、帯単元として位置付けて指導を行なう。継続して行なうことが大切である。それと平行するように、②基本単元と③関連単元の指導は行われる。

小学校で培われた音声言語能力を基礎にして、中学校3年間の見通しをもって計画的・系統的に指導をする必要がある。「中学校国語指導資料」を参考に、1年…19時間、2・3年…15時間の年間指導計画を作成した。紙面の都合で、1年のみ掲載する。

音声言語年間指導計画　　1年

月	単　元	時数	指導目標	主な指導事項	主な学習活動
4	自己紹介をする （自作教材） <表現>	2	・自分の特徴がよくわかってもらえるように、教材を整理して話す。 ・級友の特徴をとらえて聞く。	・自分の考えを正確に表現するために、必要な話題や題材を選び出すこと　（表ウ） ・話し言葉と書き言葉について理解すること　（言(1)カ） ・話す速度や音量、言葉の使い方などに注意すること　（言(1)ア）	1自己紹介の材料を集める。 2原稿を書く。 3自己紹介のスピーチをする（聞く）。
5	詩の朗読 （のはらうた ） <理解>から <表現>へ	2	・詩の朗読を工夫し、楽しむ。	・文章の内容や特徴がよく分かるように朗読すること　（表ク） ・話す速度や音量、言葉の使い方などに注意すること　（言(1)ア）	1詩の内容に合った朗読の仕方を工夫する。 2速度、音量、強弱、緩急、間のとり方、気持ちの込めかたなどに気をつけて練習をする。 3朗読会をして、お互いに評価をする。
9	二分間スピーチ （夏休みの体験を伝える） <表現>	3	・体験したことを発表し合い、スピーチを楽しむ。	・身近な生活に素材を求め、表現しようとすることについて自分の考えをまとめること　（表ア） ・自分の考えや気持ちを整理し、言葉遣いに注意して話すこと　（表ケ）	1夏休みの体験を素材にしてスピーチ原稿を書く。 ・取材メモを作る。 ・順序を決め、簡単な原稿を書く。 2二分間スピーチをする。 ・できるだけメモを見て話すようにする。 ・聞き取りメモをとりながら聞く。
11	話し合いを深める （自然の小さな診断役） <理解>から <表現>へ	5	・自分の考えを分かりやすく発表したり、人の話の要点をおさえて聞いたりして、話し合いを深める。	・自分の考えや気持ちを整理し、言葉遣いに注意して話すこと　（表ケ） ・話し合いにおけるそれぞれの発言を注意して聞き、話し合いの方向をとらえて自分の考えをもつこと　（理ク）	1筆者の意見に対して自分の意見を持つ。 2自分の意見の根拠になる事柄を調べる。 3意見を発表するための工夫をする。 4学級で発表する。 5聞き取りメモをとりながら聞き、自分の考えを深める。
1	古文の朗読 （蓬莱の玉の枝） <理解>から <表現>へ	2	・文語文の朗読を通して、音声言語表現のの楽しさを味わう	・文章の内容や特徴がよく分かるように朗読すること　（表ク）	1歴史的仮名遣いに注意して音読する。 2文章の意味や背景を理解し、表現の特徴について理解する。 3朗読会を行なう。 4暗唱する。
3	豊かな読書・表現活動を <理解>から <表現>へ	5	・「銀河鉄道の夜」を読んで感じたことや考えさせられたことを話し合い、課題を決めて調べ学習をして、発表する。	・話や文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を確かめること（理イ） ・優れた表現に触れ、その特色に注意して自分の表現の参考にすること　（表現カ） ・全体の構成を考え、事実と意見、部分と全体との関係を考えて表現すること　（表エ） ・話し合いの話題や目的をとらえ、的確に話すこと。　（表コ）	1作品を読んで考えさせられたことを発表する。 2読み深め、調べたい課題を決める。 3調べ学習をする。 4他の作品を読む。 5テーマを決めてまとめる。 6発表会を開く。 7お互い意見交換ができるようにする。

Ⅳ　授業実践

1　単元について

(1)　単　元　名　　身の回りを見つめる　「自然の小さな診断役」「本当に必要なものは」

(2)　単元の目標　　文章の構成をとらえ、身の回りの暮らしを考える

2　単元設定の理由

(1)　この単元で扱う教材「自然の小さな診断役」は、身近な問題をユニークな視点で分析した文章である。このような科学的、論理的な文章を通して、新しいものの見方、考え方を学び、自分のものの見方、考え方を確かめさせることができる。そして授業で得た情報をもとにして、自分の意見をもたせることができる。そうして得た意見を論理的なものにするために、更に根拠となる情報を収集して、発表させることによって、音声言語表現能力が育つものと考え、この単元を設定した。

(2)　音声言語表現に関する学習としては、一学期に①「自己紹介」②「詩の朗読」、二学期には③「夏休みの体験発表－二分間スピーチ」をやった。三回とも全員が発表することはできた。音量も徐々に大きくなってきたが、聞き手に分かりやすく話そうと工夫するまでには至らなかった。

　また、事前に行なったアンケートからは、「話し合いをすること」に対しては過半数の生徒が「好き」と答えているが、「みんなの前で発言や発表をすること」は好きとは言えない生徒が大半を占めてしまう。更に、「自分の考えをまとめて相手に分かりやすく話すこと」ができない、話したいと思ったことを「十分に話せない」と思っている生徒も70％に達している。

　このような実態にある生徒達に、興味のある自然環境問題についての情報を提供し、そこから自分の意見を持たせ、話す内容を準備させることによって、自信を持って発表に臨ませるような活動を工夫するために、この単元を設定した。

3　単元の指導計画（９時間）と指導目標

	次(時)	学　習　活　動	指　導　目　標
理解活動／表現活動	1 (1)	○教材を概観する。 ①学習のねらいをとらえる。 ②全文の内容をとらえながら、すらすら読む。 ③形式段落を確認する。	①科学的な文章を読み、自然保護や環境問題について関心を持つ。
	2 (2)	○要点をまとめる。 ①班ごとに各段落の要点まとめをする。	②文章の要点をとらえ、構成を考える。
	3 (1)	○要旨をとらえ、意見を持つ。 ①要旨(筆者の意見)をとらえる。 ②自分の意見を持つ。	③筆者の考えをとらえ、それについて自分の考えを持つ。
	4 (3)	○意見の根拠を調べる。 ①意見をはっきりさせ、その根拠となる事柄を調べる。 ②調べた事実を根拠にして意見を述べるための原稿を作る。 ③発表のための掲示資料も準備する。	④自分の意見の根拠を調べる。
	5 (2)	○発表会をする中で、自分の考えを深める。 ①自分の意見を論理的に分かりやすく発表する。 ②人の意見を考えながら聞く。 ③人の意見を聞くことによって深まった意見をまとめて発表する。	⑤自分の意見を分かりやすく発表する。 ⑥人の話を要点をおさえて聞き、自分の考えを深める。

4　本時の指導計画

(1)　指導目標

自分の意見を論理的に分かりやすく発表したり、人の話を要点を押さえて聞いたりして、自分の考えを深める。

(2)　本時で押さえたい基礎基本的事項

①　自分の考えや気持ちを整理し、言葉遣いに注意して話すこと。（表 ケ）

②　事実と意見、部分と全体との関係を考えて表現すること。（表 エ）

③　話し合いにおけるそれぞれの発言を注意して聞き、話し合いの方向をとらえて自分の考えを持つこと。（理 ク）

④　話す速度や音量、言葉の使い方などに注意すること。（言(1) ア）

(3)　授業の仮説

①　話す内容をしっかり把握して準備しておくことができれば、積極的に話すことができるであろう。

②　自分の意見をはっきりさせ、その根拠となる事柄を調べて述べることができれば、論理的な話ができるであろう。

③　人の話を聞くとき、自分の意見との違いを確認しながら聞くと、主体的な聞き取りができるであろう。

(4)　展　開

過程	学習内容・活動	指導上の留意点	評　価
導入 (5)	(1)筆者の意見を確認する。 「ダニも人間も、みんないっしょに生きていける自然の姿が、人間の住みやすい環境だと思う。」 (2)筆者の意見に対して、自分はどう思うのかをはっきりさせる。	・黒板に貼られた筆者の意見を一斉に読んで確認する。 ・賛成か反対かを挙手によって意思表示させる。	〔観察〕 自分の意見をはっきりもっているか。＜理解＞
展開 (30)	(3)今日の学習目標を確認する。 ①自分の意見を分かりやすく発表する。 ②他の人の発表を自分の意見と比べながら聞く。 (4)自分の意見を根拠を添えて発表する。 （「発表のてびき」を参考に） （発表するときは、前の人の意見に対して、自分はどう思うかをはっきりさせてから、自分の発表をする。）	・なるべく原稿に頼らないように。 ・話すポイント （はっきりした声で） （速度に気をつけて） （意見と事実を区別して） ・聞くポイント （自分と比べながら） （根拠をおさえて） （メモを取りながら） ・自発的に挙手させて8名に発表させる。	〔観察〕 話すポイントに気をつけて話しているか。 ＜表現＞ メモをとりながら聞いているか。＜理解＞ 積極的に発表しようとしているか。＜表現＞
まとめ (15)	(5)自分の考えをまとめる (6)まとめた感想を発表する。 (7)授業の評価をする。	・何人かの意見を聞くことによって、更に深まった自分の意見を感想も含めて書く。 ・次時に全員させる。 ・自己評価をさせる。	〔机間巡視〕 自分の考えを、根拠になる事実と区別して書くことができる。＜表現＞ 〔観察〕 積極的に発表しようとしているか。 ＜表現＞

5　授業の考察

(1)　授業仮説①についての考察

積極的に発表するためには、話す内容をしっかり把握し、準備しておくことが必要だと考えて、自分の意見をしっかり持たせるようにした。

筆者の意見を的確にとらえ、その意見に対して自分の意見を持つためには、まず文章の要旨を正確にまとめることができなければならない。そこで、要点や要旨をとらえる作業は班ごとにさせ、正確さを期した。授業後のアンケートを見ると、「文章の要旨をまとめることができた」生徒は29名、「自分の意見をしっかり持つことができた」生徒は23名となっていて、筆者の意見は80％以上の生徒がとらえられたものの、自分の意見を持つに至ったのは70％にとどまっている。話題がダニのことなので、筆者の意見に賛成できないと考えた生徒も半数近く見られた。賛成の生徒は、比較的意見がはっきり固まっていたが、反対の生徒は調べ学習をしている途中も、他の生徒の意見を聞く場面でも、自分の意見を確定できず、揺れ動いている生徒が目立った。本時を終えた段階では、全員が自分の意見を持つことができたが、発表の前に意見を持つことのできた生徒は、本時でも積極的に発表しようとする姿勢が見られた。逆に、挙手できなかった生徒は、その理由として「調べる時間が足りなかった」「調べ方が分からなかった」など、発表の準備ができてないことをあげていた。アンケートの感想にも「原稿に話すことが書いてあったので、発表しやすかった」「原稿がちゃんと書けなくて発表ができなかった」という記述が見られた。

意見を積極的に発表するためには、事前に原稿を準備することが効果的であることが分かった。

(2)　授業仮説②についての考察

意見をはっきり持つことができれば、それを述べることはできる。しかし、その意見の内容が「論理的」であるかどうかについては、別の問題である。ここでは、「意見の根拠を添えて話す」ことを「論理的」であると考えて、生徒に調べ学習をさせた。その結果、生徒は自分の意見の根拠を参考図書から調べることにより、自分の意見に自信を持ち、論理的に発表することができた。また、そのための工夫として、参考図書の一覧表を提示したり、調べ学習に慣れてない生徒は、同じ意見を持っている者同士で共同で調べさせたり、一つの資料を共同で使わせたりした。そして、発表のための掲示資料の作成も指示した。

授業では、より論理的な話し方ができるように、「発表のてびき」を基に発表原稿を準備させた。発表原稿の準備ができている生徒は、その話型に沿って発表することができた。初めに「賛成」か「反対」かという結論を述べ、その後に根拠を説明する。そして最後にもう一度結論を述べるという「双括式」で話すことにより、「論理的」で分かりやすい話ができるようになった。二番目の発表者からは、前の人の話に関係付けて話すようにさせた。そのことによって話間に筋を通そうとしたことと、聞き手に分かりやすい話にすることを意図した。

生徒の自己評価の結果を見ると、授業前に一番評価の低かった「自分の考えをまとめて相手に分かりやすく話すこと」が、わずかではあるが上昇した。また、「話し合いの話題に合った意見を言うこと」も「できる」が増えている。「双括式」の話型によって、根拠をはっきり示すことが「論理的」な話をするために効果的であることが分かった。

資料　双括式の話型による発表原稿

筆者への私の考え

私は、筆者の意見に反対です。なぜかというと、害虫や病原菌について、「安心して食べられる農作物」という本と、「人間と地球の健康」という本に、次の事が書いてあったからです。

ナスには、青枯れ病という病気があって、土の中に病原菌がはびこる病気なので、一度その病気にかかった土地では、健康なナスを育てることは、非常に困難ということです。

害虫がいるため農薬が作物の中に残り、人間に慢性毒性をもたらすという事もあります。

野菜につく病気や害虫のために、農薬をだんだん強くしていくと、益虫も死んでしまいさらに、農薬に強い害虫が発生する。そして色や形はきれいだが、農薬に汚染された野菜ができ上がって、私達の食卓に並ぶのです。

このことから私は、害虫がいるために農薬をたくさん使い、人間に害を与えるので、私は、筆者の意見に反対なのです。

(3) 授業仮説③についての考察

授業前のアンケートでは、友達の話を聞く時「よく聞こうとしている」という生徒は24%しかいなかった。「普通に聞いている」生徒が76%であるが、生徒の「普通」とはどういう聞き方であろうか。

「主体的な聞き方」とは、自分の意見との違いを確認しながら聞くようにすることである。自分の意見が賛成の場合、賛成意見を聞く時は、「自分と同じだが、根拠はどうだろう」とか「こういうことからも賛成と言えるんだなあ」などと考えを深める。また、反対の立場の意見を聞く時は、「なぜ反対というのだろうか」という疑問を持ってその根拠に耳を傾ける。その結果、自分はやはり賛成するか、あるいは考えを変えるか、もっと調べてみたいと思うか等、更に高度に進んだ考えに至るようになる。そのように、考えながら聞くことが「主体的な聞き方」といえるのではないだろうか。

そこで、「主体的な聞き方」をさせることを意図して、友達の発表をききながら「聞き取りメモ」を取らせた。その結果、授業後のアンケートでは「よく聞こうとしている」と答えた生徒が24%から53%に増えた。メモを取ることによって、聞こうとする自覚が高まったためである。また、友達が「役に立つことを言ってくれる」と思う生徒が約10ポイント増えた。自分の意見がまとまらなくて困っている時、友達の意見を聞いて参考にすることができた経験が、この数字につながっている。授業後の感想の中の「メモを取りながら聞いたので、分かりやすかった」も、メモの効用を裏付けるものである。更に、本時では自分の意見に自信がなかった生徒も、その次の時間には「まとめの意見」をより論理的に発表することができた。このことから、人の意見を聞く時は、自分の意見との違いを確認しながら主体的に聞くことを指導することが重要であることが分かった。

V 研究の成果と今後の課題

1 成 果

(1) 音声言語の取り立て指導として、発音・発声の練習や一分間スピーチをさせることによって、声を出す楽しさを味わい、話すこと、聞くことについて意欲的に取り組むようになった。

(2) 音声言語表現能力を身に付けるための指導の場を、生徒が興味を持っている話題についての理解学習の発展として位置付けて、積極的な表現をさせようと試みた結果、発表のための情報収集が意欲的となり、積極的な読みから主体的な音声言語表現へと結び付けることができた。

(3) 論理的な話し方を身に付けさせる指導の工夫で、双括式の話型や聞き取りメモを利用した結果、分かりやすく論理的な話し方をしたり、話し合いの中で自分の考えを深めたりできるようになった。

(4) 三年間の年間指導計画を作成することによって、見通しをもった、系統的な音声言語指導の実践が可能になった。

(5) 生徒の自主性を促す学習活動を取り入れることによって、主体的な読み手、聞き手を育成することにつながった。

2 今後の課題

(1) 学校全体の日常の音声言語環境の整備

(2) 年間指導計画に沿った音声言語指導の実践

〈主な参考文献〉

文部省 『中学校学習指導要領』	大蔵省印刷局	1989年
文部省 『指導計画の作成と学習指導の工夫－音声言語の学習指導－』	ぎょうせい	1992年
安居總子他『中学校の表現指導 聞き手話し手を育てる』	東洋館出版社	1994年
全国国語教育実践研究会 『実践国語研究158号』	明治図書	1996年
全国国語教育実践研究会 『実践国語研究143号』	明治図書	1994年
全国国語教育実践研究会 『実践国語研究135号』	明治図書	1994年
高橋俊三編著 『音声言語指導のアイデア集成④中学校』	明治図書	1996年
斎藤喜門監修 『情報化時代「説明文」の学習を変える』	学芸図書	1996年